

◆ 継手 (つぎて)

- 木材の使いかた。継手による分けかた。

樹木は自然の恵みを受け生長し。樹木の幹の根株(根元を元口と云う)は大地にしっかりと根をおろし。樹木の幹の上部(梢(びえ)を末口と云う)は太陽の日の光を浴びて大きく生長していく意味から。元口・末口が発生した。

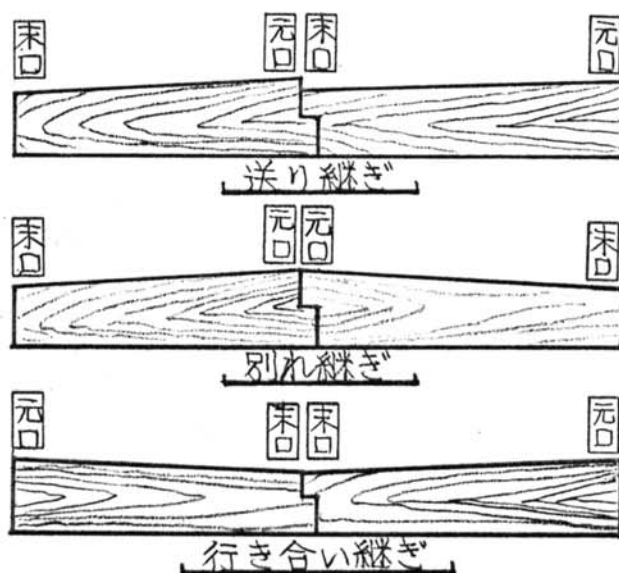
柱(軸組材)等(大地に根をおろし)で下部(柱脚)は元口とし。柱頭上部(日の光を浴び生長する)を末口として架構し。自然にあやかって使用(加工法)されてきた。 ※柱を逆木(上記の逆使用)に架構した家は自然にさからい衰退・消滅するといわれてきた。

外部化粧材(横架構造部材)。特に軒桁・丸桁(がぎょう)・棟木や母屋の木鼻など。では太陽の昇る方向・日の光を受ける方向と云って。東～南に樹木(梢)の末口をむけて架構すると。家が(昇る)栄えるといわれていた。

木材の継手に付いて。元口と末口を継ぐ場合を送り継ぎ。末口と末口を継ぐ場合を行き合い継ぎ。元口と元口を継ぐ場合を別れ継ぎ。などがある。

別れ継ぎに付いて。～別れ継ぎは。一般的に建物の上部横架材で架構は不吉とされているので。用いないほうがよい。

特に建物の高い横架材である棟木にて架構は大凶といわれ用いないこと。



- 継手の位置による。分けかた。

継手の位置に付いて大別すると。柱真継ぎと。柱間で継ぐ場合に大別される。

○柱真継ぎに付いて。～主として柱材が大きく横架材を柱に差し継ぐ社寺建築などでよく使用される継手工法で。柱の上部に化粧桁を架構(桁下に力貫を取付ける)する場合などや。簡易な構造の場合ではよく用いられる。(広縁の縁桁などで用いられる)

○柱間で継ぐ場合に付いて。～横架構造材の継手に付いて大別すると。二つの材の加工欠除が女木と男木によつての違いや。

女木に男木を乗せ掛ける工法で。柱真の各仕口に差しつかえのない位持ち出して継手位置を定める。継手として主にあり継ぎ、かま継ぎなどがある。

